

## ロードベルトウスの商業 恐慌論について

吉田 茂 芳

### 一

「鐵道や機械を建設し、かつ諸財の原料を自然のふところから取り出すためのすべての要素が存在している。にもかかわらず、そこからなにも生じてこない。」(Die Forderungen der arbeitenden Klassen, 1837. Zur Beleuchtung der sozialen Frage, Teil II. herg. von Adolph Wagner und Theophil Kozak, 1899, S. 208.)——チャーチストの運動に直接の影響を受け、一八三七年の最初の論文で、いち早く『勞働諸階級の要求』をとりあげたロードベルトウスも、十九世紀初頭のドイツの現狀に對しては、このように嘆かざるをえなかった。そればかりでなく、この論文自身が、アウグスブルク一般新聞に投稿されたにもかかわらず、「私(ロードベルトウス)が警鐘をうちならした危険が、われわれの社會組織に見いだされないという理由で」送りがえされるありさまであった(Briefe und Sozialpolitische Aufsätze von Dr. Rodbertus-Jagetzow,

herg. von Dr. Rudolf Meyer, 1880, S. 137—138.)。

しかしまもなく、この世紀の中頃になると、ドイツでも貧困と商業恐慌がしだいに識者の注意をひくやうになった。すなわち、「數十年このかた注目されたことは、貧困が不斷に増大しつつあることであり、……」貧困に關しては幾千の例證がある。「ビュレ(Büre)<sup>(2)</sup>が大きくイギリスにおいて證明したことは、われわれにおいても、こまかくプロイセンのあらゆる都市における勞働者住宅の探訪によつて知ることができる。」「歴史は、昔のどんな時代にも、社會の一部の貧困の繼續的な増大、國民の一つの同じ階級の貧困の不斷の増大が、國民の富の繼續的な増大と同時にこなわれたことを示すことはできない。」「貧困が一般的注意をひいたとはほ同じ以前から、いわゆる商業恐慌が、週期的な循環において、交易にその荒廢をひきおこした。」(Die sociale Bedeutung der Staatswirtschaft, Erster Brief an von Kirchmann, Berlin 1850. Zur Beleuchtung der sozialen Frage, Teil II, 1899, S. 99, 100, 105, 106.)

そしてこの二つの「現代の社會問題」その原因と解決策をめぐる「キルヒマン(Julius Hermann von Kirchmann 1802—1884)」とロードベルトウスとの間に論争が展開されることになった。周知のように、キルヒマンあての四つの社會書簡は、この論争によつて産みだされたものである。そのうち『第一書簡』(一八五〇年)は、貧困はしばしば論じられてきたが、「商

## 一 橋論叢 第三十七卷 第一號

業恐慌は、なおまとまっては取扱われていない。それゆえ私（ロードベルトゥス）は、それを一層十分に聞いてもらはねばならぬ（Erster Brief, a. a. O., S. 99）と云つて、これを主題にしている。まずこの書簡によって、ロードベルトゥスの見た商業恐慌の特徴を紹介したい。

1) 『一橋論叢』第三十三卷第五號（昭和三十年五月）において、私は、この論文の内容を紹介した。

2) ユー・アン（Antoine Eugène Baret 1810—1842）。ローン・ベルトゥスは、脚註として、ユアン（ユアン）の書物をあげてゐる。

De la misère des classes laborieuses en Angleterre et en France. Bruxelles 1842. この書物の初版は、パリ一八四〇年。メンガー文庫所蔵。フランスの道徳および政治・科学アカデミーの懸賞論文に當選した（同書序文）。

3) シュピートホフ（A. Spiethoff）が國家諸科學辭典の『恐慌』の項目でとりあげているロードベルトゥスの書物は、『第一書簡』のほかに、Die Handelskrisen und die Hypothekennoth der Grundbesitzer, 1858. Das Kapital, Vierter sozialer Brief an von Kirchmann, 1883. （平瀬譯『資本』昭和二十四年）であり、また文獻として、Hermann Bahr, Rodbertus' Theorie der Absatzkrise, 1884. 及び Handwörterbuch der Staatswissenschaften, 4. Aufl. 1925. の「ベルト」の

に詳細に、ロードベルトゥスの筆になるもののうち恐慌が取扱われている部分を、手紙にわたってまであげている（H. Bahr, a. a. O., S. 6）。

## 二

ロードベルトゥスは、商業恐慌の外的特徴をつぎの點に見る。すなわち、産業の主要部門における突然の販路停滯、その全部門への波及、商品價格の急激な下落、生産的財産（produktives Vermögen）の減價、債務履行の一般的不能、無數の破産あるいは支拂停止、生産の一時的な部分的な制限あるいは停止、何千と云う労働者の失業（Erster Brief, a. a. O., S. 106—107）。この恐慌は、つねに「國民の幸福のあらゆる條件がもつともゆたかに存在し、諸資本がもつとも多く蓄積され、信用がもつとも發達しており、生産性がもつとも高く、労働者がもつとも自由に活動している」ところの世界の交易の中心、すなわちイギリスに始まり、兩半球の最後の商業地にまでその諸作用を及ぼす（Erster Brief, a. a. O., S. 107）。

恐慌にちかだつて、商品價格の騰貴、生産諸企業の状態増大、新發明による生産性の上昇、資本蓄積の進行、利率の低下、國立諸銀行の預金および現金の増加、信用獲得の容易、勞賃の騰貴、等々の「例外なくまさしく異常な程度の繁榮と結論される徴候が、すべてに先行する。」（Erster Brief, a. a. O., S. 108）ロードベルトゥスは、恐慌を「繁榮→販路停滯→

破局→需要回復→繁榮の週期的な循環においてとらえた (Erster Brief, a. a. O., S. 106, 109)。『第一書簡』が書かれるまでにおこった恐慌は、一八一八—一九年、一八二五—二六年、一八三六—三七年、一八三九—四〇年、一八四六—四七年、の五つである。

恐慌による犠牲はしだいに大きくなる。「度をかさねるにつれて、富の増大に比例して、これらの恐慌のおそろしさは増し、恐慌が與えた犠牲は、一層大となった。」(Erster Brief, a. a. O., S. 110)。一八一八—一九年の恐慌は、一般的な労働者運動を喚起し、オウエン、サン・シモン主義者、フーリエ主義者にかからの理念に對する證據を見いださしめ、スミスの體系に疑問を抱かせ、一方ではリカード、セー、他方ではシスモンディ、マルサス、との間に過剰生産に關する興味ある論争をよびおこした (Erster Brief, a. a. O., S. 118)。しかしこの恐慌は、つぎのそれにくらべると小さいものであった。一八二五—二六年の恐慌は、「もっとも有名な國家經濟學者たちがその恐慌の完全な回復を疑ったほどの恐ろしく、イギリスの資本財産 (Capitalvermögen) に與えた。にもかかわらずそれは、一八三六—三七年の恐慌によって壓倒された。一八三九—四〇年の恐慌、および一八四六—四七年の恐慌は、それにさきだつ諸恐慌より一層強力な破壊をさらにふたたびひきおこした。」(Erster Brief, a. a. O., S. 110—111)。

しかも循環の期間はしだいに短縮され、恐慌は慢性化する。

# 研究ノート

「これまでの經驗によれば、この病氣が循環する間隔は、ますます短くなる。第一の恐慌から第三の恐慌までに十八年が経過した。第二の恐慌から第四のそれまでには十四年が、第三の恐慌から第五のそれまでには十三年が、経過した。」(すくなくとも後の諸恐慌の間隔は、もはやけつして、病氣の餘勢からそれほど完全にいやされはしない。これらの後の一層はげしい發作は、慢性となった苦痛に對して健康の努力が無駄なことを示すにすぎないように思われる。)(Erster Brief, a. a. O., S. 111)

最後に、販路停滞とともに繁榮からその反動としての破壊が始まり、「この反動は労働者において終る。」労働者は飢餓にひんし、不満は高まる『第一書簡』までにロードベルトゥスが經驗した最後の恐慌の状態を、かれは當時の一商況報告から引用している。「マンチェスターがどうなっているかは、つぎの數字がもっともよく示している。(一八四七年)三月十四日には、一七七の工場のうち、完全に仕事をしているのは九八であり、五〇の工場が半分だけ、二九がまったく仕事を停止している。完全に就勞している労働者は、二一、五〇七人であり、九、二八七人は半分だけ、九、五三九人は全然仕事をしていない。労働者の困窮は、工場主の新聞、マンチェスター・ガーディアンに自由するところによってさえも、ますます増えている。そして、たとえ労働者の一般的不満の爆發の兆候が、これまでのところではまだ示されていないにせよ、しかしこのような懸念は、ずっとひろまっている。それゆえ十四日には、當地の治安官がひそ

かに集って、秩序の維持と萬一の爆發を抑壓するために必要な處置を協議した。」(Erster Brief, a. a. O., S. 166.)

以上見てきた恐慌の一般的考察につづいて、ロードベルトゥスは、當時の出版物、商況報告、新聞等を引用し、あるいは經濟學者、商業文筆家、統計家、合衆國銀行總裁、有名なトリイ黨員、専門的知識をもった一證人、牧師、等々をつぎつぎと登場させて、個々の恐慌についてのヴィヴィッドな描寫をしてゐる。ここでは省略せざるをえないが、この部分が『第一書簡』のもっとも精彩ある個所であるように思われる。

1) ルーコフは、ロードベルトゥスの描寫の一部を引用して、「巨匠の筆をもつ」えがいたと言ひ(Karl Rodkopf, Rodbertus Theorie von den Handelskrisen, 1892, S. 14)。<sup>1)</sup> ローザ・ルクセンブルグは、「かれは、その『第一社會書簡』においてすでに、一八一八—一九年、一八二五年、一八三七—三九年および一八四七年の四恐慌を立ち入って描寫している。長い觀察のおかげで、ロードベルトゥスは、部分的には、その先驅者にできたよりも深く恐慌の本質を洞察することができた。」と述べている(『資本著論』高山譯、三笠書房、昭和二十七年、中巻八六頁)。

### 三

ロードベルトゥスは、商業恐慌の原因を労働者階級の分配分

遞減に歸した。いうまでもなくその遞減は、これらの階級の貧困に外ならないから、兩者は、密接に結びついており、同一の原因から生じる(Zweiter Brief, a. a. O., S. 37)。「……貧困と生産恐慌、生産恐慌と貧困、なぜなら兩者は相互に原因と結果だから。」(Zweiter Brief, a. a. O., S. 1.)。「このような貧困からの立ちあがりがかろうじて始まったにしても、惹起する恐慌が、それを一層深い貧困へと投げかえし、貧困それ自身によって一つのより簡単な循環がおこなわれるにすぎぬ。」(Erster Brief, a. a. O., S. 176.)

ここでごく簡単にロードベルトゥスの賃料理論にふれておかねばならぬ。かれによれば、「賃料とは何びとかがみずから労働する要なしに、所有權に基いて、取得する所得である。賃料は、土地賃料と資本賃料とにわかれる。」(平瀬譯『國家經濟』八七頁)。まず賃料が、國民所得(國民生産物のうち生産期間中の資本—原料および道具のみの消耗分を控除した残り)に屬することに注意すべきであろう。賃料もまた、「労働者が支拂を受けるのは、労働を始める前ではなく、労働をいとなんだ後に生産物の配分として支拂われるが故に、所得に屬する(同四十頁)。つまり國民所得が分配されてはじめて剩餘價值たる賃料は實現され、労働者は賃料を得るわけである。ところで賃料發生のためには、つぎの二條件が絶対に必要である。(1) 労働者が、労働の繼續のために必要とされるもの以上を生産すること。このような剩餘がなければ、いかなる人も労働せずして所

得を収奪できない。(2) この剰餘を労働者から収奪して、労働しない他者に與えるところの諸組織、つまりこれは、土地および資本所有に外ならず、またそのもとにおける實定法である (Zweiter Brief, a. a. O., S. 51.)。

さて賃料發生の條件が與えられ、しかもこれが賃料とともに國民所得の分配において實現されるとすれば、ここに國民所得のなかで賃料と賃料との對立關係が生じる。「一配分が大となればなるほど、他の配分は小とならざるをえない。」(Zweiter Brief, a. a. O., S. 52.)。だが賃料は、必要生計 (notwendiger Unterhalt) に釘づけされねばならぬ。必要生計とは、労働者が「かれの労働力を維持し、かれの子孫を保育するために必要な」財の額であり、賃金はこの重力點に牽引される (Die Forderungen der arbeitenden Klassen, a. a. O., S. 213.)。とすれば、労働の生産性増大にともなつて、労働者の配分が相對的に減少し、反對に賃料が増大することは、おのずからあきらかである。「事實、賃料は、ヨーロッパでは、生産物のますます少くなる部分となつた。その結果、賃料一般は増大した。」(Zweiter Brief, a. a. O., S. 79.)。この結果、労働諸階級の、すなわち主要な販路たる社會の五分の四ないし六分の五の購買力は、生産の進展につれて擴大せず、反對にこれに應じて縮小することになり、ロードベルトゥスは、ここから販路停滯の必然性がまことに容易に説明される、とする (Zweiter Brief, a. a. O., S. 38.)。

# 研究ノート

こうしてロードベルトゥスの過少消費説が成立するのであるが、しかし以上によつては、商業恐慌の原因は説明できても、その週期性はあきらかにならない。ロードベルトゥスは、恐慌の外的特徴においては、その週期性を描いたけれども、それに理論的な根據を與えていない、と言えるであらう。

- 1) ロードベルトゥスによれば、貨幣、投機、信用の諸事情は恐慌の眞の原因とならない。したがつて、「商業恐慌はたんに貨幣と取引所とあるいは信用と恐慌としてのみ把握するとすれば、まちがっている。商業恐慌は、その最初の發生において、外面的にそうした現象をとるにすぎない。」(Die Handelskrisen und die Hypothekennoth der Grundbesitzer. Gesammelte kleine Schriften, 1899, S. 226.)。ちやうどロードベルトゥスは、ルクセンブルグも指摘しているように、私的生産の無政府狀態が恐慌をうみだす要因であることを知らなかったわけではない。ただあくまでも原因の重點を、労働諸階級の分配分遞減に求めたのであった。平瀬氏も同様の主張をされている (平瀬、『古典經濟學の解體と發展』日本評論社、昭和二五年、二八七頁、ルクセンブルグ、上掲譯書、中卷九二頁)。
- 2) ロードベルトゥスはいう、「この思想はあたらしく、そして私は、それを私のものと主張する。」と (Erster Brief, a. a. O., S. 1.)。しかしシスモンディを無視するわけにはゆかない。それは、最初の二つの恐慌の描寫にあたって、

## 一 橋 論 叢 第三十七卷 第一號

シスモンディの『經濟學新原理』第二版からの引用をしてゐるのをもつてわかる (Erster Brief, a. a. O., S. 116—117, S. 124—125)。そして、シスモンディもまた「周知のように」「かかる恐慌の直接の原因を、かれは、労働諸階級の側における過少消費のなかに見た」のである (H. Grosse, Simondi, Encyclopaedia of the Social Science, Eleventh Printing, 1954)。ここからエンゲルスの『反デューリング論』における批判がでてくる。だが同時に兩者の相異も強調されてゐる。まずロードベルトゥス自身によつて (Zur Erkenntnis, S. 29, Anmerkung, 平瀬上掲譯、四七頁)。フュラーやバーンハイム (G. Adler, Robertus, der Begründer des wissenschaftlichen Sozialismus, 1884, S. 52, H. Bahr, a. a. O., S. 16)。しかし詳細は、つぎの二著にゆずりたい。平瀬上掲書、二八三—二八六頁、ルクセンブルグ、上掲譯書、中巻、九二—九四頁。

## 四

商業恐慌をいかにして防ぐか。その原因を除去するために、労働諸階級の所得を高めること以外にはない。ロードベルトゥスは正常価値の構成によつてこれをなさんとした。以下主として、『正常労働日』(Der Normalarbeitstag, 1871, Gesamte kleine Schriften, 1899) にあつてこれを説明する。

正常価値とは、正常労働、初期の『國家經濟』では費用労働によつて決定された価値である。この正常労働ないし費用労働は、強度の點で様々な具體的労働ではなくて、これらの質的差違が、時間と仕事の二つの面から平均化された「質的にひとしい労働」である (Der Normalarbeitstag, a. a. O., S. 338, 344)。したがつてこれは、マルクスの価値の實體としての労働であり、正常価値は、リカードオの絶対価値、マルクスの交換価値の本質としての価値と同概念である (平瀬上掲書、六九、七六頁)。しかし自由放任の交易のもとでは、生産物の現實の交換価値とその正常価値との一致は事實ではない (Zweiter Brief, a. a. O., S. 69)。そこでロードベルトゥスは、將來におつて實現するべき理念として、正常価値の構成を考える。すなわち、正常労働にもとづいて、一方では、各企業の生産物価値が構成され、他方では、各企業の賃金もまた支拂われるところの状態、かくして×正常労働の価値を有する全國民所得が、同様に×正常労働の額になる賃金に消化される状態、を構想した (Der Normalarbeitstag, a. a. O., S. 343)。

しかしロードベルトゥス自身も認めるように、これは、「もっとも純然たる空想」である (Der Normalarbeitstag, a. a. O., S. 344)。労働者は、いかなる社會状態においても、かれの全正常労働生産物を受けとることはできぬ。というのは、土地および資本所有なき國家經濟においても、「國家經濟的官廳」の諸機能をはたす役人には、俸給 (Gehalt) が支拂われるからで

ある。今日では、この諸機能を土地および資本所有者がおこなう。したがって、土地賃料と資本利得は、みぎの俸給に外ならぬ (Der Normalarbeitsstag, a. a. O., S. 345)。

このように土地賃料と資本利得をみたのち、ロードベルトゥスは、社會問題解決のもっとも具體的な提案に移るが、その核心は、正常労働にもとづいて生産物価値が構成され、賃金がこの生産物価値の配分比率において固定されること、に歸する。これによって、たとえば、賃金が全國民生産物価値の十分の三に——殘餘が土地賃料、資本利得および國家需要に——固定されるとすれば、最初のうちは、たとえこの十分の三が必要生計にひとしい額を含むにすぎないとしても、二十年後に、生産性

が二倍になれば、賃金もまた、必要生計の二倍となろう。かくして賃金鐵則は排除され、社會問題は解決される。「眞實賃金は、いまや實際、生産性の増大にしたがってともに増大し、今日の土地賃料額あるいは資本利得額からは、いささかの控除もされない」ことになる (Der Normalarbeitsstag, a. a. O., S. 34—35)。しかも以上のことは、ひとりでおこなわれるものではない。「もっぱら國家の干渉によって！」ロードベルトゥスに關する種々の文獻は、たいていここから、かれの國家社會主義者としての一面の説明に入る。

(一橋大學研究生)